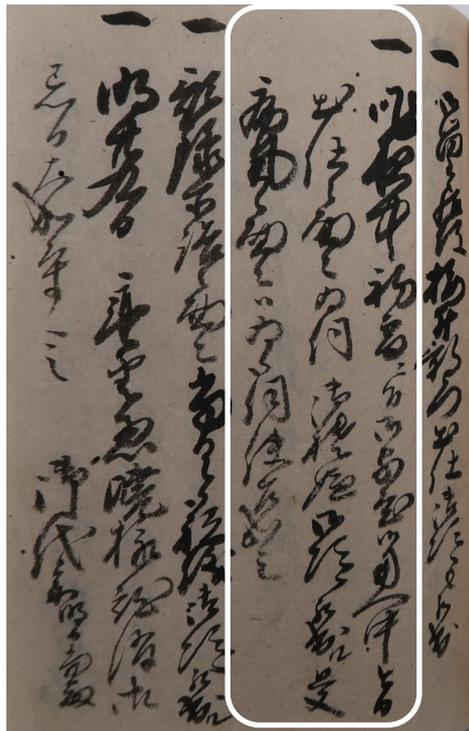


一、昨夜中初雪ニ付、御家老・御用人中今日
出仕之面々、為伺 御機嫌御次へ罷出ル、且又
病氣之面々ハ為御伺使差出之、



「記録所日記」明和7年10月28日条(徳山毛利家文庫「記録所日記」357)

天気 ③

「天気」の見舞い

《天候の見舞い》

藩や大名に関係する江戸時代の日記を見ていると、交流の一端として、見舞いを行っている記事をよく目にします。

病気に罹った際などが好例です。日記の書き手が自ら患者のもとへ足を運んだり、使者を派遣するなど、その時の様子が窺えます。

天気に注目してみると、徳山毛利家文庫の中に2つの見舞いの事例がありましたので紹介します。

《初雪》

上の写真の囲みの部分は、明和7年(1770)10月28日の「記録所日記」の記事です。場所は徳山です。

記事によれば、前日の夜中に初雪が降ったことから、家老・用人ら藩士が徳山藩7代藩主毛利就馴のもとへ御機嫌伺いのため「御次」という場所まで出仕し、病気でそれが叶わない者は使者を送ってき

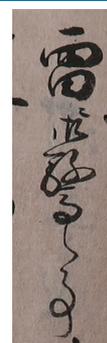
た、とあります。他の年の日記にいつも同様の記事が見えるわけではないため、初雪が降ると藩主のもとに家臣が御機嫌伺いのために参ることが定例化していた、とは断じられませんが、そうした行為が行われる場合があったとの指摘ができそうです。

なおこの時は「寒冷強」と寒さが厳しかったようで、当時下松にいた大殿様(5代藩主毛利広豊)にも見舞いの手紙が送られています(徳山毛利家文庫「御居間日記」256/明和7年10月28日条)。

《雷(雷雨)》

雷…甚大な被害を及ぼしかねないこの自然現象は、その発生のメカニズムを理解している現代であっても、雷鳴や稲妻に対して心理的に恐怖を感じる人が多いのではないのでしょうか。

江戸時代の人々にとっても変わりなかったようで、日記の中には雷発生に伴う見舞いの記事がありました。



徳山毛利家文庫「福間隆廉自記」3 天和3年5月21日条

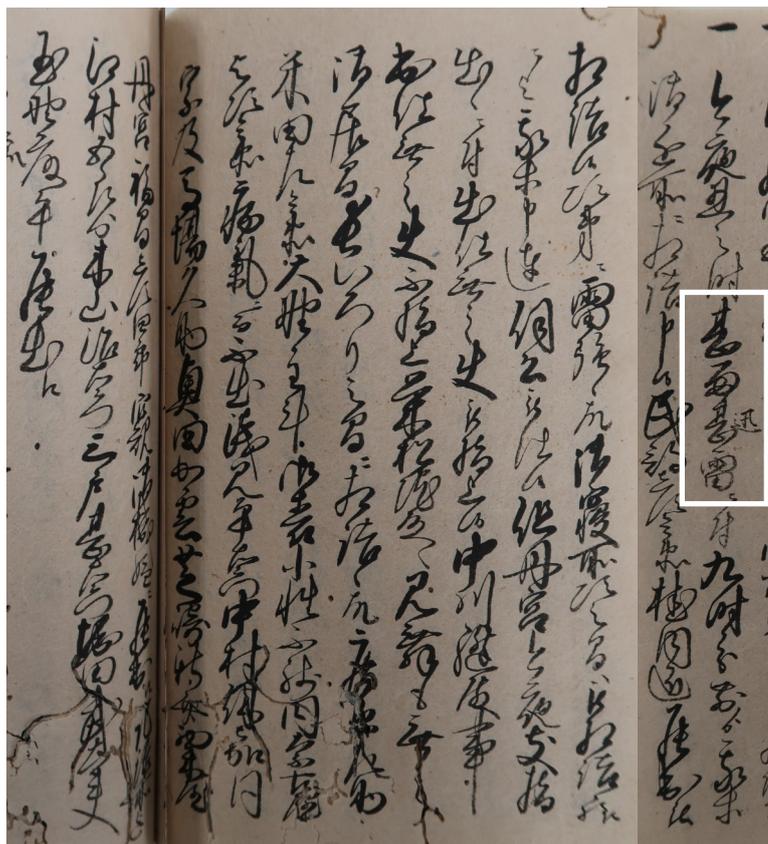
藩主毛利元賢の行状を正そうと、天和3年(1683)5月21日、家老たちが集まりました。その時、元賢への是正点の一つに挙げたのが上の写真の「雷ニ御驚候事」。殿様が雷に驚くことも、家臣には盾をひそめることだったようです。

元賢の名誉のために、翌年の貞享元年(1684)6月7日の激しい雷雨の際に、元賢は雷に驚かなかつたとありました(「福間隆廉自記」6)。

貞享元年(1684)7月8日深夜の江戸のできごとです。「甚雨迅雷」とありますので激しい雷雨だったのでしよう。徳山藩2代藩主毛利元賢のもとに、福間茂左衛門らが詰めることになりました。ところが、次第に雷が強まったことから、彼らは「御寝所次之間」、つまり藩主が休んでいる隣室に移動したようです。藩主の不安を少しでも和らげる措置だったと思います。日記には多くの家臣が詰めていた様子が窺えます。また、自身が出仕できない者は使いを

出して藩主の御機嫌を伺っています。その後、雨の静まり(雷も落ち着いたのでしよう)とともに、詰めていた人々は引き上げていきました。

なお、この雷雨については、翌9日、外様大名衆は將軍の御機嫌を伺うため、老中大久保忠朝に使者を派遣しています。將軍を気遣う大名、大名(藩主)を気遣う家臣。雷は身分の上下を問わず、相手を気遣う必要のある、薄気味悪いものだったようです。



「福間茂左衛門隆廉日記写」(徳山毛利家文庫「福間隆廉日記」6)
貞享元年(一六八四)七月八日条

迅

- 一、今夜丑之時甚雨甚雷二付、九時分前五我等御近所二相詰申候、民部・彦兵衛・桂内匠罷出被相詰候、次第二雷強候故、御寝所次之間へ被相詰候様
- 二与我等申達伺公被仕候、但、丹宮今夜支指出候二付出仕無之使被指上候、中川縫殿事、出仕無之使不指上、柴松院殿へ見舞も無之、御居間長いろり之間二相詰候故、庄原左助・米田左兵衛・大野主計、御表小姓不残内奈古屋与次兵衛病氣二而不出、浅見平右衛門・中村休嘉・同宗及・馬場久助・奥田如雲・芝崎新介・栗屋丹宮・福間彦四郎窺御機嫌二罷出ル、記録所迄江村五郎左衛門・木山治右衛門・三戸甚右衛門・堀田武太夫・玉野藤平罷出ル、